The Journal of Shimonoseki University of Fisheries 30 (1) 83 — 89 (1981)

日本におけるラルフ・フォックス文献目録：1932—1981*

坂本　肇

A Bibliography of Ralph Fox in Japan : 1932—1981

By
Hajime SAKAMOTO

Ralph Fox (1900-1937) is an English writer who was killed in the Spanish Civil War. His posthumous work, *The Novel and the People* has been regarded as the highest level of British Marxist literary criticism in the 1930s. But no comprehensive bibliography of Ralph Fox studies has been published up to now. This is an annotated bibliography of Japanese Fox studies which contains books, journals, bulletins, dictionaries and handbooks of and on Fox, published in Japan from January, 1932 to June, 1981. They are listed in the following order : (I) Translations of Fox ; (II) Articles on Fox in books, journals and bulletins ; (III) Fox in books, journals, dictionaries and handbooks ; (IV) Fox in translations. As to bibliographical notes of Japanese Fox studies, see the present compiler's "A Note of Ralph Fox Studies in Japan," *New Perspective*, Vol. 12, No. 2 (June 1981).

はしがき

ラルフ・フォックス (Ralph Fox, 1900-1937) の小説論『小説と民衆』(*The Novel and the People*, 1937) は，クリストファー・コードウェル (Christopher Caudwell) の『幻想と現実』(*Illusion and Reality*, 1937) と並んで，イギリスの1930年代におけるマルクス主義文学理論の最高峰と評されているが，作家としてのフォックスはそれ以外にも，『草原地帯の人びと』(*People of the Stepps*, 1925) というルポルタージュや『ジンギスカン』(*Genghis Khan*, 1936) などを書いている。しかし，そのようなフォックスの文学業績を評価する研究は，これまで日本においてもほとんど継承されておらず，文献目録にいたっては皆無の状態であった。

本報告は，これからのフォックス研究において一助となることを願って，1932年（昭和7年）1月から1981年（昭和56年）6月までに日本で出版されたラルフ・フォックスについての文献をまとめたものである。

* 水産大学校研究業績　第922号，1981年8月10日受理．
Contribution from Shimonoseki University of Fisheries, No. 922. Received Aug. 10, 1981.

採集した文献は，次のように類別し編成した。

I．フォックスの著作のうち，飜訳されたもの。

II．フォックスについての紹介記事と研究論文（月報，英語教科書も含む）。

III．フォックスについて言及のある単行本，紀要・雑誌，辞典等。

IV．フォックスについて言及のある英語で書かれた単行本，雑誌などで飜訳されたもの。

IIIとIVについては，フォックスの名前，あるいはその著作名だけを言及したにすぎないようなものも関係文献として記載した。フォックスがいかに評価されているか，また評価されていないかを知ることは，今後の研究において不可欠である。

訳著誌の原典は特に断りのない限り，発行地はすべてロンドンである。

訳者の解説のうち，紹介もしくは研究と見なされるべきのはIIに，ただ言及のみなされているものはIIIに記載した。IVの言及のある飜訳書誌のうち，訳注においても言及のある場合は〔 〕でそのページ数を記載した。

編者の書誌的注は〔 〕で後記した。フォックス原著 *The Novel and the People* は*NP*と略称した。

I．飜　　訳

1．〔米田三治〕訳「リスボンにて」『世界文化』28号。1937年4月。pp. 42-46.〔*Portugal Now* (Lawrence and Wishart, 1937) の第4章 "Arms and the Airman" を訳したもの。数箇所カットされている。〕

2．加藤朝鳥訳『成吉思汗』竹村書房，1938年。pp. 331.〔*Genghis Khan* (John Lane the Bodley Head , 1936). 加藤寿々子「あとがき」, pp. 329-331.かなり自由な訳出。〕

3．西川昌久訳『小説と人民』（未来芸術学院叢書第17巻）未来社，1955年。pp. 198.〔*The Novel and the People*(Lawrence and Wishart , 1937). 底本としてJack Beeching が "Preface" を書いているCobbett Press 版第2版（1948年刊）を使用。索引と訳者あとがきなし。〕

4．由良君美訳『ジンギスカン』（偉大な生涯第3巻）筑摩書房，1967年。pp. 286.〔*Genghis Khan* (John Lane the Bodley Head , 1936). 底本として1962年刊行の Daimon Press (Castle Hedingham) の再版本を使っている。写真，地図。「訳者あとがき」はII．11参照。〕

II．紹 介 と 研 究

1．木村　毅「英吉利の新聞雑誌と文芸の交渉」『現代世界文学篇上巻』（世界文学講座第12巻）新潮社，1932年1月。pp . 254-255.〔『サンデー・ワーカー』の書評担当者フォックスを初めて紹介。〕

2．木村　毅「旧友の戦死」『東京日々新聞』1937年3月2日。p . 9 .〔生前のフォックスと交友関係のあった日本人として貴重な証言。〕

3．「片々録――フォックスの戦死」『英語青年』77巻1号。1937年4月1日。p . 33.

4．奥村誠之助「コルドバで戦死せる英国作家ラルフ・フォックス」『世界文化』28号。1937年4月。pp. 28-32.〔奥村誠之助は米田三治の仮名。フォックス論と *NP* 論。*Left Review*, 1937年2月号所収の"Ralph Fox-A Tribute" などの抄訳を含む。〕

5．「文化ニュース」『セルパン』第一書房。1937年4月号。p. 119.〔フォックスの戦死を報道し，略歴と著作を述べる。〕

6．北村常夫「ラーフ・フォックスに関する覚書」『三田文学』12巻9号。1937年9月。pp. 34-41.〔英吉利文学特集号。フォックスの生涯と *NP* 論。〕

7．中西　毅「Henderson と Fox との小説批評」『アルビオン』京都大学英文学研究会，1937年9月。pp. 154-159.〔フォックスの *NP* の他に，Philip Henderson の *The Novel Today* (1936), Stephen Spender の *The Destructive Element* (1935) をとり上げて，Rubbock , E. M. Forster, Muir などの小説論と比較して論じている。〕

8．成田成寿『最近イギリス文学論』研究社，1948年。pp. 39, 40, 106, 121-138, 141, 147, 163.〔とくに第2章「イギリス社会文学」で *NP* を詳しく紹介。1930年代の英文壇の中に位置づけて論じている。〕

9．内山　敏「ラルフ・フォックス――武器をとった作家」『反戦作家群像』同友社，1948年。pp. 126-143.〔フォックスの著作，*Lenin: A Biogra-*

phy (1933), *Communism and a Changing Civilisation* (1935), *Genghis Khan* (1936), *France Faces the Future*(1936), *NP*, *Ralph Fox:A Writer in Arms* (1937) などから引用したトータルなフォックス論。〕

10. 飯沼 磬「スペインに消えた英国の赤い星——ラーフ・フォックスとその『小説と民衆』——」『海潮音』6号。山口書店, 1954年3月。〔II. 10参照。〕

11. 飯沼 磬編『作家と政治——英国三十年代を中心として——』研究社, 1958年。pp. vi, 316.〔論文集。フォックスについて論じたものは, 編者の飯沼が書いた「三十年代における文学上の諸問題をめぐって——スペンダー, C. D. ルイス, フォックス, アップワード, コードウェルたち——」(pp. 154-199. 初出誌未詳。) と「ラルフ・フォックス——その生涯と, 評論『小説と民衆』について——」(pp. 200-226.) が収録されている。前者は*NP*論。後者はII. 10の論文を加筆訂正し改題したもの。資料はもっぱら *Ralph Fox: A Writer in Arms* (1937) に拠っているが, フォックスの生涯と人となりについて詳しい。*NP* 論も詳細。〕

12. 由良君美「訳者あとがき」ラーフ・フォックス (由良君美訳)『ジンギスカン』(偉大な生涯第3巻) 筑摩書房, 1967年。pp. 273-286.〔フォックスの経歴について新しいデータを含む。先行訳書 I. 2の批判的検討。シャープなフォックス論。〕

13. 山崎 勉「インターナショナリスト東洋をみる」『20世紀文学』7号。南雲堂, 1967年。pp. 110-117.〔I. 4の書評。〕

14. 久津木俊樹編注 *The Novel and the People* (英文フォックス『小説と人民』) 英宝社, 1971年。pp. iv, 82.〔英語教科書。原書 *NP* の第5章から8章までを編注。〕

15. 〔エジェル・リックワード〕(横山潤訳)「ラルフ・フォックス, スペイン, 統一」『資料世界プロレタリア文学運動』6巻。三一書房, 1974年。pp. 205-206.〔Edgell Rickword〕, "Ralph Fox, Spain, Unity," *Left Review*, Vol. 3, No.1 (Feb. 1937), pp. 1-2.〔*Left Review* の同人であったフォックス追悼の巻頭論文。〕

16. 久津木俊樹「ラルフ・フォックスの小説」『外国文学研究』34号。立命館大学人文科学研究所, 1975年11月。pp. 1-21.〔フォックスの作品, *People of the Stepps*, *Storming Heaven* (1928), *Genghis Khan*, *This Was their Youth* (1937) などを *NP* にからめて論考。〕

17. 児玉春樹「『小説と人民』」『新英米文学研究会月報』67号。1975年12月。〔ページ付けなし。II. 14をテキストにした読書会報告。〕

18. 山本 証「『小説と人民』について(1), 1, 『序文』について」『新英米文学研究会月報』67号。1975年12月。〔II. 17に同じ。〕

19. 山本 証「『小説と人民』について(1), 2, 『序文』について(つづき)」『新英米文学研究会月報』68号。1976年1月。〔II. 17に同じ。〕

20. 勅使川原純一「フォックス著『小説と人民』chapter II, "The Victorian Retreat"」『新英米文学研究会月報』68号。1976年1月。〔II. 17に同じ。〕

21. 加藤一郎「『小説と人民』第8章〈英雄の死〉について」『新英米文学研究会月報』69号。1976年2月。〔II. 17に同じ。〕

22. 石川礼子「*The Novel and the People*, chapter III, "The Prometheans"」『新英米文学研究会月報』70号。1976年3月。〔II. 17に同じ。〕

23. 富岡次郎「イギリス作家とスペイン戦争」『イギリス社会主義運動と知識人』三一書房, 1980年8月。pp. 319, 325-327, 329, 335, 363, 365, 386.〔フォックスについてかなり詳しく言及しているが, 資料はほとんどII. 11に拠っている。〕

24 坂本 肇「日本におけるラルフ・フォックス研究史ノート」『季刊・新英米文学研究』(*The New Perspective*) 12巻2号。新英米文学研究会, 1981年6月。pp. 4-14.〔主要な文献の解題と評価を歴史的に試みて, フォックス研究の問題点を述べている。〕

III. 言及のある単行本・雑誌・辞典等

1. N. R. T.「英米文学新声」『英語青年』77巻1号。1937年4月1日。p. 30.

2. N. R. T.「英米文学新声」『英語青年』77巻6号。1937年6月15日。p. 210.

3. 〔無署名〕「スペイン戦線に立つイギリスの知識人と文学者」『セルパン』1937年5月。pp. 88-89.

4. N. R. T.「英米文学新声」『英語青年』77巻10

号。1937年8月15日。p. 341.
5．〔無署名〕「スペイン文化擁護国際作家会議報告」『セルパン』1937年9月。p. 85.
6．N. R. T.「英米文学新声」『英語青年』78巻2号。1937年10月15日。p. 55.
7．N. R. T.「英米文学新声——本誌創刊以来の英文壇の批評鑑賞の発展」『英語青年』78巻8号。1938年1月15日。p. 247.
8．成田成寿『英国批評史』（研究社英米文学語学講座）研究社，1940年11月。pp. 26, 47.
9．N. R. T.「英米文学新声——New Writing in Europe」『英語青年』85巻6号。1941年6月15日。p. 178.
10. 中桐雅夫「lost generation の告白」『荒地』1947年10月。〔現代詩文庫『中桐雅夫詩集』（思潮社，1971年）に再録。p. 125.〕
11. 成田成寿「イギリス社会的文学」『英語青年』94巻3号。1948年3月1日。p. 68.
12. 西川正身「両次大戦間　B　英国」中野好夫編『現代世界文学構座　イギリス・アメリカ編』新潮社，1950年。p. 133.
13. 中桐雅夫『危機の詩人』（現代芸術選書）早川書房，1954年。p. 77.
14. 森　清「『スペイン』——オーデンとその群れ——」『海潮音』6号。山口書店，1954年3月。〔II，10に再録。p. 120.〕
15. 斉藤　勇編『世界文学辞典』研究社，1954年。p. 387.
16. 飯沼　馨「文学と政治——ジョージ・オーウェルの場合——」『大阪経済大学論集』15号。1956年。〔「文学と政治——ジョージ・オーウェルの見解——」と改題してII，10に再録。pp. 262-263.〕
17. 斉藤　勇『イギリス文学史——第4増補版』研究社，1957年。pp. 523, 581n.
18. 飯沼　馨「三十年代における英国作家の動向——一つの概観——」同編『作家と政治——英国三十年代を中心として——』研究社，1958年。pp. 17, 32, 37, 39, 41, 43, 45.〔初出誌未詳。〕
19. 飯沼　馨「三十年代の回顧と将来への展望——ジャック・リンゼイの場合——」〔II，18に同じ。pp. 275, 276, 279, 283, 285, 290, 301, 306. 初出誌未詳。〕
20. 小林高四郎『ジンギスカン』（岩波新書）岩波書店，1960年。p. 205.
21. 成田成寿「イギリス文学（1940年まで）概観」『英米文学史講座第10巻　二十世紀I』研究社，1960年。pp. 22-23.
22. 笠　啓一「文献解題——マルクス主義」『現代芸術の理論』（講座現代芸術第6巻）勁草書房，1960年。p. 238.
23. 飯沼　馨「政治と文学」『英米文学史講座第11巻　二十世紀II』研究社，1961年。pp. 133-134.
24. 小野協一「オーウェルの政治意識」『オベロン』5巻3号。南雲堂，1961年10月。p. 25.
25. 平井正穂「オーデン・グループの人々」『英語研究』研究社，1961年11月。〔平井正穂『イギリス文学試論集』（研究社，1965年）に再録。p. 285.〕
26. 加納秀夫編『現代英米文学人名辞典』（研究社レファレンス・ブックス）研究社，1961年。p. 94.
27. 斉藤　勇編『英米文学辞典——増訂新版』研究社，1961年。pp. 358, 1528.
28. 上田　勤・大橋健三郎・増田義郎共編『20世紀英米文学ハンドブック』南雲堂，1962年。p. 278.
29. 小倉多加志・須藤信雄・小川好雄共編『英米文学作家作品年表』南雲堂，1964年。1965年改訂版。p. 69.
30. 水田　洋『マルクス主義入門——この思想の流れを創造した人びと』（カッパ・ブックス）光文社，1966年。pp. 195, 239-240.〔現代教養文庫『マルクス主義入門』（社会思想社，1971年）として再刊。pp. 187-188, 236-237.〕
31. 森　常治「批評の方法」鈴木幸夫編『文学思潮』東京堂，1967年。pp. 213-214.
32. 小池　滋「現代の文学——第二次大戦の前夜」平井正穂・海老池俊治共編『イギリスの文学』（世界の文学史第4巻）明治書院，1967年。p. 268.
33. 富原芳彰『英米作家作品年表』研究社，1967年。p. 146.
34. 小林高四郎「〈座談会〉モンゴルの世紀」『日本と世界の歴史第10巻　十三世紀』学習研究社，1969年。p. 10.
35. 野町　二・岡本　通共編『英米文学ハンドブック』開文社，1969年増補改訂版。p. 96.
36. 清水幾太郎『現代思想　上』（岩波全書）岩波書店，1970年。p. 211.
37. 長田　弘「〈解説〉スペイン戦争の芸術家たち

——索引の試み」同編『スペイン人民戦争』(全集・現代世界文学の発見第3巻) 学芸書林, 1970年。p. 392.

38. 橋口 稔「解説——スペイン戦争とオーウェル」ジョージ・オーウェル (橋口稔訳)『カタロニア讃歌』筑摩書房, 1970年。p. 304.〔George Orwell, *Homage to Catalonia* (Secker & Warburg, 1938)〕

39. 鈴木 寧「1930年代と第二次大戦中の作家たち」『小説III』(講座英米文学史第10巻) 大修館, 1973年。pp. 166-167.

40. 森 清「戦いと抵抗」中村善也編『西洋文学を学ぶ人のために』世界思想社, 1973年。p. 145.

41. 小池 滋「あとがき」アーノルド・ケトル (小池 滋・山本和平・伊藤欣二・井出弘之 共訳)『イギリス小説序説』研究社, 1974年。p. 394.〔Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel* (Hutchinson, 1951 & 1953)〕

42. 出口保夫「現代イギリス文学概観——その社会的背景を中心に」同編『現代イギリス文学入門』(英米文学シリーズ第11巻) 評論社, 1975年。p. 17.

43. 羽矢謙一「時代に生きる作家たち」斉藤美州編『イギリス文学史序説——社会と文学』中教出版, 1978年。p. 472.

44. 鈴木史郎「訳者あとがき」J. M. ホーソーン (鈴木史郎訳)『文学における独自性と関連性』未来社, 1979年。pp. 269-270.〔Jeremy Hawthorn, *Identity and Relationship——A Contribution to Marxist Theory of Literary Criticism* (Lawrence and Wishart, 1973)〕

45. 赤祖父哲二『現代批評文学論——方法と実践』中教出版, 1979年。pp. 19, 20, 215.

46. 小野協一『スペインの内戦をめぐって——イギリスの一九三〇年代文学』(研究社選書) 研究社, 1980年。pp. 182-184, 194.

Ⅳ. 言及のある譯訳

1. スティーブン・スペンダー (山本恒訳)「都市の陥落」木下順二・木島始共編『イギリス解放詩集』(河出文庫) 河出書房, 1954年。p. 61, (62). Stephen Spender, "Fall of a City," Stephen Spender & John Lehmann, ed., *Poems for Spain* (Hogarth Press, 1939), p. 86.

2. ピーター・ケリガン (山中明訳)「共産党とスペイン戦争」イギリス共産党編 (山中明訳)『イギリス共産党三十年』国民文庫社, 1955年。pp. 136-138.〔原著名不詳。〕

3. ハーバート・リード (飯沼馨訳)「社会主義リアリズム」『芸術論集』みすず書房, 1957年。1969年新版。pp. 265-268. Herbert Read, "Socialist Realism," *A Coat of Many Colours : Occasional Essays* (Routledge, 1945), pp. 214-215.

4. スティーヴン・スペンダー (高城楢秀・小松原茂雄・橋口稔共訳)『世界の中の世界——自伝』南雲堂, 1959年。pp. 242-243. Stephen Spender, *World within World* (Hamish Hamilton, 1951), pp. 202-203.

5. R. A. スコット＝ジェイムズ (朱牟田夏雄・青木雄造共訳)『現代英文学の五十年』英宝社, 1960年。p. 338. R. A. Scott＝James, *Fifty Years of English Literature ; 1900-1950* (Longmans, Green & Co., 1951)

6. C. D. ルイス (土屋哲夫訳)『埋もれた時代——若き詩人の自画像』南雲堂, 1962年。p. 262. C. Day Lewis, *The Buried Day* (Chatto and Windus, 1960), pp. 214-215.

7. E. P. トムソン「鯨の外に」同編 (福田歓一・河合秀和・前田康博共訳)『新しい左翼——政治的無関心からの脱出』岩波書店, 1963年。p. 166. E. P. Thompson, "Outside the Whale, " *Out of Apathy* (Stevens, 1960)

8. ヒュー・トマス (都築忠七訳)『スペイン市民戦争 II』みすず書房, 1963年。p. 32. Hugh Thomas, *The Spanish Civil War* (Eyre and Spottiswoode, 1961. Penguin Books, Harmondsworth, 1977. 3 rd ed.), p. 491.

9. スティーヴン・スペンダー「都市の陥落」徳永暢三訳『スティーヴン・スペンダー全詩集：1928-1953』思潮社, 1967年。p. 117, (259-260).〔Ⅳ. 1参照。〕

10. ジュリアン・サイモンズ (志水速雄訳)『1930年代』日本文献センター, 1967年。p. 211. Julian Symons, *The Thirties: A Dream Revolved* (Cresset, 1960), p. 123.

11. レイモンド・ウィリアムズ (若松繁信・長谷川光昭共訳)『文化と社会：1780-1950』ミネルヴァ

書房，1968年。p. 222. Raymond Williams, *Culture and Society : 1780-1950* (Chatto and Windus, 1958. Penguin Books, Harmondsworth, 1968. p. 265.)

12. F. R. ベンソン（大西洋三・中理子・中島斉・松本唯史・山崎勉・吉田武士共訳）「武器をとる作家たち——スペイン市民戦争と六人の作家」紀伊国屋書店，1971年。pp. 37, 81, 108, 135. Frederick R. Benson, *Writers in Arms——The Literary Impact of the Spanish Civil War* (New York University Press, New York, 1967), pp. 14, 56, 84, 112.

13. ジョン・グロス（橋口稔・高見幸郎共訳）「イギリス文壇史——1800年以後の文人の盛衰」みすず書房，1972年。pp. 220, 222. John Gross, *The Rise and Fall of the Man of Letters—— Aspects of English Literary Life since 1800* (Weidenfeld and Nicolson, 1969)

14. スタンレー・ハイマン（樹沢厚生・樹沢雅子共訳）「マルクス主義的方法」（批評の方法第7巻）大修館，1974年。pp. 63, 64. Stanley E. Hyman, "Christopher Caudwell and Marxist Criticism," *The Armed Vision——A Study in the Method of Literary Criticism* (Knopf, New York, 1947), p. 192.

15. アーネスト・ヘミングウェイ（樋口秀雄訳）「ファシズムは嘘である」栗原幸夫編「資料世界プロレタリア文学運動 第5巻」三一書房，1974年。p. 532. Ernest Hemingway, "Fascism is a Lie," *New Masses* (June 22, 1937), p. 4.

16.〔無署名〕（海野厚志訳）「レフト・レヴュー」栗原幸夫編「資料世界プロレタリア文学運動 第6巻」三一書房，1974年。pp. 217-220. Annon., "Left Review," *Left Review*, Vol. 3, No. 16 (May 1938), pp. 957-960.

17. アーノルド・ケトル（小池滋・山本和平・伊藤欣二・井出弘之共訳）「イギリス小説序説」研究社，1974年。pp. 119-120. Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel* (Hutchinson, 1953), p. 120.

18. サミュエル・ハインズ「序論」クリストファ・コードウェル（玉井茂・深井龍雄・山本昭夫共訳）「ロマンスとリアリズム——イギリスブルジョア文学の研究」法政大学出版局，1977年。p. 17. Samuel Hynes, "Introduction," Christopher Caudwell, *Romance and Realism——A Study in English Bourgeois Literature* (Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1970), p. 15.

19. ジュリアン・サイモンズ（中島時哉・川成洋共訳）「彷徨と混迷の時代——1930年代の政治と文学」朝日出版社，1977年。pp. 169,〔190〕. Julian Symons, *The Thirties: A Dream Revolved* (Faber, 1975. Revised ed.), p. 111.

20. ジェイスン・ガーニイ（大西洋三・川成洋共訳）「スペインの十字軍」東邦出版社，1977年。p. 106. Jason Gurney, *Crusade in Spain* (Faber, 1974)

21. ジョージ・サンプソン（平井正穂監訳）「ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅳ」研究社，1978年。p. 140. George Sampson, *The Concise Cambridge History of English Literature* (Cambridge University Press, Cambridge, 1970. 3 rd ed.), p. 860.

あ と が き

主要な文献の解題については，拙稿「日本におけるラルフ・フォックス研究史ノート」（「季刊・新英米文学研究」第12巻・2号所収，1981年6月発行）を参照されたい。

ここでは，その後に発見した若干の資料によって，同研究史ノートの戦前におけるフォックス紹介の部分を訂正・補足しておこう。

フォックスの名前を日本に初めて紹介したのは，滞英中にフォックスと面識のあった木村毅であることは間違いないが，木村は「東京日々新聞」昭和12年3月2日号にフォックスの追悼記事を寄稿した以前に，すでにフォックスについて言及している。すなわち，1932年（昭和7年）正月に新潮社から発行された世界文学講座第12巻の「現代世界文学篇上巻」において，「英吉利の新聞雑誌と文芸の交渉」というエッセイを書いた木村は，そのなかで「サンデー・ワーカー」を紹介し，その書評担当者としてラルフ・フォックスの名前を挙げているのである。これが日本におけるフォックス紹介の最初であると言って差し支えないようである。

木村は,『サンデー・ワーカー』の芸術批評欄について,「凡てを非常に鮮明なマルキシズムの角度から是非するので,ロシヤの文学の紹介や批評も,主としてこれを通して英国へは注入されるのである」と書いているが,『サンデー・ワーカー』紙にあってロシア文学の紹介・批評に当ったのは,フォックスであった。フォックスはモスクワのマルクス・エンゲルス研究所に勤務していたこともあり,ロシア語にも精通していた。

さらに木村は,「滞英中,文芸批判の眼はこの眇たる小新聞によって最も多く訓練せられた事を告白せざるを得ない」とまで書いている。木村が『サンデー・ワーカー』を読んでいたのはもちろんのこと,ラルフ・フォックスから〈文芸批判の眼〉を学んでいたことは明らかである。

フォックスがスペインで戦死したのは1937年正月初めであったが,『セルパン』4月号が「文化ニュース」の欄でそれをとりあげていたこともここに書き記しておこう。それによると,「イギリスの浪漫的,政治的青年作家ラルフ・フォックス」の戦死を報道し,かれの略歴と著作をかいつまんで説明している。ニュース・ソースは,同じ月に出版された『世界文化』第28号掲載の奥村誠之助こと米田三治「コルドバで戦死せる英国の作家ラルフ・フォックス」と同じく,同年2月ロンドンで発行された『レフト・レビュー』誌に拠っている。『世界文化』が発行部数も少なく読者層も限られていたのに比して,『セルパン』は昭和6年創刊の月刊総合文化雑誌で,当時かなり広く読まれていたので,その影響は大きかったと思われる。

戦前のアカデミズムにおいて,フォックスが注目されかけただけではなく,すでに一定の位置づけを与えられていたことも書きそえておかねばならない。本文献目録において明らかなように,『英語青年』は1937年4月から一年たらずのうちに少なくとも6回,フォックスに言及している。それから3年ほどして,成田成寿『英国批評史』(研究社英米文学語学講座,1940年)が出版された。

成田は,その小冊子のなかで,1930年代には社会主義的文学論がイギリス文壇に抬頭したことを述べ,エドワード・アップワード,アーサー・コールダー・マーシャル,クリストファー・コードウェル,シー・ディ・ルイスやスティーブン・スペンダーなどがマルクス主義文学観に「興味を持った」と書いている。成田は,〈社会主義的文学論〉の代表的なものとして,アップワードとフォックスを例にとっているが,フォックスについていえば,小説を近代の叙事詩と考える18世紀の小説家フィールディングの考えを現代のフォックスが踏襲しているとして,フォックスの「小説と民衆」を伝統的なイギリス小説論の流れの中に位置づけたのである。

同冊子が出版発行されたのは,1940年(昭和15年)11月30日である。第二次世界大戦はすでに進行し,日独伊三国同盟が成立し,国内では大政翼賛会が発会した時期であった。